

ヨーゼフ・アロイス・シュンペーター 「思想家カール・マルクス」

小林 純

はじめに

ここに紹介するのは、J.A. シュンペーター (1883-1950) のマルクス論である。シュンペーターのまとめたマルクスに関する記述としては、『資本主義、社会主義、民主主義』(1942年)と『経済分析の歴史』第3編のものが知られている。預言者、社会学者、経済学者、教師、の節に分けられた前者は、シュンペーターの死後に未亡人が編集した『偉大な経済学者：マルクスからケインズまで』(中山・東畑監修『十大経済学者』日本評論新社、1952年)に再録された。後者『経済分析の歴史』では、マルクスは「ただ社会学者および経済学者としてのみ」扱われ、とされている。とはいえどちらも、マルクスを論ずるには著作の全体が、とくに経済学では『資本論』とともに『剰余価値学説史』が、参照されねばならないことを強調している。この二つの本格的な議論に対して、本稿は「思想家マルクス」と題された短い新聞記事であり、小さな「史料」的価値しかもたぬもの、としてよかろう。私はこの史料的价值を、1. 1918年という比較的早い時期のものであること、2. 後年には表に出ない民族問題に触れていること、に求めたい。その説明は解題にゆずる。

シュンペーター 「思想家カール・マルクス」

人間の歴史は書物によって作られるのではない。だがわがヨーロッパの文化圏には、造形的で教育的な力によって人びとの心にとってとても大切なものとなったことにより、われわれの運命とわれわれの文化とに結びついているように思われ、その書の名を挙げることなくしては社会史の叙述が不可能となっているような何冊かの書物がある。マルクスの『資本論』はその一冊である。わが時代とその闘争の中から生まれ、別の時代と別の闘争を指し示すこの書は、われわれの闘いと苦悩の力強い記念碑である。友であれ敵であれ、この書物の偉大さを感じている。

カール・マルクスは思想家にとどまらなかった。彼は政治的活動の人でもあった。そして彼のユニークなところは、研究者と闘争家とが彼のうちで相互に離れがたく浸透しあっており、彼は自己の闘いに方向を示すためにのみ研究し、研究の成果を活動によって示すためにのみ闘った、ということにある。人生のあらゆる困窮や迫害を通じて、彼は自らの思想構築の作業に忠実であった。そして彼の確信が求めた行為への覚悟は、あらゆる理論的な仕事を貫いて響いている。彼の研究の進展における歩みのどの一歩も、政治的闘争場裏における実践的行動を促進し、すべての政

治的闘争は彼をたえざる思考の更新作業へと連れ戻す。認識と意志とが彼におけるほどの高次元の統一へと織り合わさっていることは他のだれにも見られぬことであり、彼はわが身とその大きな力とを厳しい自己犠牲心をもってこの統一に捧げたのである。だがわれわれは、いまは思想家についてのみ語ることにしよう。

カール・マルクスは、まずもって経済学者であった。彼はまた他の知の領域をも駆け巡ったのではあるが、彼の中心的作業は、資本主義経済の複雑なメカニズムを明らかにするという課題に向けられた。彼は限りなき周到さと献身をもって作業に向かった。彼が、全知識を、当時のすべての歴史のおよび同時代的な事実資料を自らに取り込んでいくさまは、それしかできない書齋学者でもいまだかつてなしえなかったほどである。ケネーとリカードゥから始めた彼は、まさにこの両者がつまずいた点で彼らを超えようとした。その点とは、資本利潤の成立の解明である。資本主義的経済に対するわれわれの態度は、その大部分がこの問題に対するわれわれの見方にかかっている。資本利潤は、資本主義的経済の上部層を支えている梁であって、この梁をはっきり理解するのではなければ、資本主義について判断することはできない。マルクスはこの問題を彼の立場から、彼のその他の社会経済の見方が出てきた源泉である剰余価値論と搾取論によって解いた。彼以前にも多くのものが、資本主義的経済が人間による人間の搾取に基づいており、それゆえに非難されるべきであって、支持できるものではない、と論じていた。だがそれだけでは、この搾取が資本主義体制の深奥の必然性から示されないかぎり、なにも言ったことにはならない。この証明を行おうとする唯一の試み、それがマルクスによるものである。もし彼がそれ以外の何ごともなさなかったとしても、それでも彼は最も偉大な経済学者の一人であろう。

さらにカール・マルクスは社会学者であった。人間社会についての科学のおそらくは最大の成果である経済的歴史観は彼の名前に結びついている。経済的關係が人間とその意志および思考を形作り、それを通じてすべての歴史的生起とすべての文化表出とを直接に支配する、というのは一つの真実であって、この見方はあらゆる異論を——修正主義社会主義者のそれをも——ものともせずますます成功裏に普及し、世界史の巨大なパノラマを大きな統一性のうちに——階級闘争および階級文化の巨大なまとまりとして——理解させてくれる。マルクス以前に、そして以後にこの領域でなされた成果は、歴史の社会学的意味をはじめて把握したこの思想を前にすれば、すべて色あせてしまう。

一般的には、経済理論と社会理論とは内容と方法からして別のものであって、それぞれの成果はときに相互に言及されあうにすぎないが、これに対してマルクスの場合には両者は一つに絡み合っている。彼の経済理論は彼の社会理論の一部であり、彼の社会理論は経済的事象の研究のすべての一步に同伴している。こうして彼の作業は、この問題についての書物が通例はそうであるもの、つまり社会的生活の多少なりとも重要な諸側面の分析とはならず、すべての社会的存在と生成の一つの総体理論となった。このことは彼に以下のような極めて大きな特質を与えている。つまり、彼が自己の立場からおよそあらゆる問題に解答を与え、若者には欠けるところのない全体展望を与えるために、これによって武装した若者はどんな具体的な社会的状況をも思想的に克服して自らの存在と行為とを避けがたき必然性として捉える、という事態をもたらすのである。この体系は歴史の深奥に結びついている。人間の歴史をはるかにさかのぼった黎明の時代から今日に到るまで、そして今日からはるか遠き未来に到るまで、この立場から見ると、個人は原因と結果の連鎖

の無限の系列の中に繋がれているように見える。歴史的事態はすべて自ずから——個人がそれを望むか否かに関わらず——それに続く事態を産み出した。そしてすべての継起的事態は経済的必然性に支配されている。この必然性は、これを前にしては個人は無力であり、彼に自己の階級の利害に適応してその意味に依じて行為することを強いる。現在の階級的諸利害が過去の階級的諸利害から生じたこと、この階級的諸利害とその抗争が資本主義的経済をもたらしていること、そしてこの抗争のなかから新たな社会的構成が生まれざるを得ないこと、これらを示すことがマルクスの生涯の仕事であった。

社会的発展という思想は彼のどの言葉にも脈打っている。そしてこの発展の最後に、その暫定的な認識可能な目標として、資本主義の世界の内的諸関連の必然的結果として把握された社会主義がある。これが「科学的社會主義」の本質をなすのであり、このことによってマルクスはその建設者となった。社会主義者たることは他の意味でも可能である。単純に社会主義を望ましいものと考えられることはできる。例えばエドゥアルト・ベルンシュタインや、マルクス以前に一連の「空想的」社会主義者がそうだったように。もちろんマルクスも熱き魂の全力をもって社会主義を希求し、生涯にわたりそのために闘った。だが彼の思想家としての行いは、そしてこれが彼を他のものから区別するものだが、それに加えて社会主義が——望ましいか否かにかかわらず——避けられぬ必然事であることを科学的に証明しようとした、というものであった。それは、彼がエンゲルスとともにすでに「共産党宣言」において万国のプロレタリアートに告げた使命 (Botschaft) であった。社会主義は支配者・被支配者の意志など一切考慮せずに来る、社会主義者の闘っている目標は決して消滅したり打ち負かされたりすることはなく、一時の敗北や外見上の希望喪失

のときがあったところで、最終的勝利は確実である。他の政党のどの綱領も、黨員に「われわれはしかじかのことを望む。おそらくわれわれは実現するだろう」と言うことしかできない。「共産党宣言」だけが「なにが起ころうと、われわれは勝利せざるを得ない！」とすることができた。

政治的目標とこの目標の「自然法則性」の認識とのこのような結びつきは、マルクス主義的社會主義を、他の社會主義の政党目標や他のすべての方向性から明確に区別するものである。この結びつきはマルクスを信仰の預言者となし、そして彼を、ただ事実を説明しようとするか、または政治的目標を掲げようとするか、あるいはその二つをそれぞれ並べて考えているような者たちすべてをはるかに超えた高みへともたらした。それは彼を、一つの科学の教師ではなく人間の最も偉大な教師の一人とした。彼が教えたのは研究の成果だけにとどまらず、同時に、新たな来たるべき文化をも教えたのである。彼は若者の問う喜びを満足させるにとどまらず、それとともに彼らの新たな価値、感情内容、目標への欲求をも満足させてくれる。彼は若者に、時代のあらゆる現象に対する確固たる立場を与え、現代の精神生活の軋轢多く分断された喧噪のなかに一つの休止点を与える。われわれすべてのなかでただマルクス主義者だけが、時代のあらゆる現象についての定まった統一的で明確な理論をもっている。これに対して他のすべてのものは、個々のケースそれぞれについて自己の立場をその都度苦勞しながら決めていかねばならない——それゆえにこそ、マルクス主義者たちは、真にマルクスにしっかりと依拠するかぎりには、日々の論争における彼らの例の疑念の余地なき優位性を示している。

マルクス主義者は誰もこうしたことを書かなかつた。この男の偉大さは、ずっと前から批判的武器の領域を超えて成長している。そ

して彼の生涯にわたる仕事は、歴史に彼の名を刻印したのである——永遠に、力強く、消えることなく。

マルクス主義は、理想主義的あるいは政治的な綱領項目や公式的決まり文句の無思想的な価値ないし無価値を検討などはしない。マルクス主義は弁証法的にことを行う。それは公式の成立諸条件を社会経済的および歴史的な諸条件から分析する。そしてこの決まり文句を事実と比較し、その生成過程のなかに与えられた発展可能性を全過程の枠組みのなかで叙述する。所与の具体例においてこの公式が実現されないことが示されれば、この公式はおよそ事実の展開に対しては不適切であることが明らかであるから、それはうつろで誤ったものとして棄却される。

だからこそマルクス主義は、友愛とか自由、人間性などといった言葉や綱領を軽蔑することがしばしばある。ただし、マルクス主義がこうした理念のほんの一部でも実際に犠牲にしようとしたとか、友愛や自由や人間性が生きた現実であるような状態を、それが自らの主張の実現に向けたものではないから全力で支持することはない、ということではない。マルクス主義が闘うもの、それは以下のようなスローガンである。つまり、その担い手と担い手の出自に備わる指向性とを考慮すると、それによって表現された概念と理念を実現するというよりもむしろ否定する傾向にあることが見込まれるような、そういうスローガンと闘うのである。

周知のようにマルクスは民族問題を決して体系的に扱ってきではおらず、個別的に現われた問題には日常闘争のなかで弁証法的立場から触れている。

マルクスが合州国によるカリフォルニアの取得を支持したからといって、それはなにもカリフォルニアの人民に暴力と圧政をもたらすためにではない。人口密度の低いこの地域では、発展の諸条件を欠いた精神的に蒙昧な

状態のなかで上層に支配された人間集団が暮らしていた。そして合州国はこの地に、高度な経済的・精神的文化としかるべき富、自覚とブルジョワ的自由をすべての住民のためにもたらした。

若き日のマルクスが、自らはその歴史や構成について当時それほど詳しく知らなかったチェコ人や南スラヴ人を激しく攻撃したが、それは、彼らが高揚しつつあるブルジョワ的自由に対抗する絶対主義的反動を支持する道具になっていたからのことであった。反動の勝利はチェコ人や南スラヴ人にとっても長きにわたる圧政を意味したのであり、これに対してブルジョワジーの勝利、ないし彼らを抑圧する支配民族の勝利は、彼らの歴史的解放を加速することになったであろう、と考えたのである。

同様に、ポーランド人国家地域における当時の歴史なき民族的少数派の要求によるポーランド民族国家の形成に反対したり、民族的な決まり文句を引き合いに出してそれによって歴史的民族の民族的解放を後退させたり、あるいは特定地域の商売を心配するような場合には、カール・マルクスとフリードリヒ・エンゲルスがいつもその種の自治権を軽蔑したのも当然である。

アイルランドやポーランド、イタリアの自由を支持した熱烈な闘争家であったカール・マルクスを諸民族の自治権に対する反対者とみなすことは、彼を自由、人間性、正義の敵として中傷するのと同じことである。

この問題についてのマルクス主義者の見解は、そしてもちろんマルクスの見解も、植民地政策に関するエンゲルスのカウツキー宛の書簡に見ることが出来る。エンゲルスはそこに、「ただ一つのことだけは確かです。勝利を勝ち取るプロレタリアートは、他のどの民族に対してどんな恩恵をも、それによって自らの勝利を害することなしには、押し付けることはできない、ということがそれです」

[1882年9月12日 - 訳者] と書いている。

もしもプロレタリアート自らが他の諸民族を幸せにしたいと望んだとして、そのことをマルクス主義者がプロレタリアートにとって有害だと考えるのであれば、はっきりしていることは、マルクス主義者は、封建的資本主義的政府の勝利が自分たちの所有階級を強化するために他の諸民族にたいして祝福ではなく支配と経済的搾取を押し付けるような事態を、プロレタリアートの利益を思ってそれだけ激しく呪わざるを得ない、ということである。

この問題においてマルクスとマルクス主義の名を挙げるのは、羞恥心があるならば、避けるのがよからう。

Text: Joseph Alois Schumpeter, Karl Marx, der Denker, in Ders., *Beiträge zur Sozialökonomik*. Herausgegeben, übersetzt und eingeleitet von Stephan Böhm, 1987 Wien-Köln-Graz: Böhlau, SS. 89-93. 下線部は原文イタリック。

解題

本稿は短いものであり、内容的には一読してきわめて明快なマルクスおよびマルクス主義の解説であることがわかる。末尾の民族問題に触れたところは、さすがに多民族国家であるドーナウ王朝（ハプスブルク王朝）のかかえる複雑な事情を反映して、表現も微妙なものとなっているが、それでも基本的にはじつに公式的なマルクス主義の立場説明となっており、マルクス主義者の手になるものとさえ思われる。したがって以下では、この稿の周辺部分から、やや外在的に記しておきたい。

まずこの稿の初出について。これは、*Arbeiterwille. Organ des arbeitenden Volkes für Steiermark und Kärnten*, 29. Jg., Nr.

120, (5. Mai 1918) S. 3 に掲載された。

1918年5月5日はマルクスの生誕百周年にあたる。そしてこの *Arbeiterwille* つまり『労働者の意志』紙は、1908年から1934年にシュタイアー州・ケルンテン州の社会民主党機関紙として発行されていたものであり、発行地はグラーツであった。オーストリア社民党指導者オットー・パウアーはこの『労働者の意志』を、オーストリアでは党の全国機関紙『労働者新聞』(Arbeiter-Zeitung) に並ぶ労働者階級の最大かつ最重要の新聞である、と高く評価していた [Bauer 673]。当時まだグラーツ大学教授であったシュンペーターがこの社民党機関紙にマルクス論を載せたこと、これがそもそも興味深いことがらである。

まず容易に想定してみたくなるのは、政治的状况を先読みしたシュンペーターが社会主義勢力に秋波を送ったのではないか、ということである。しかし、この論稿に注目したハインリヒ・クルツはその見方をきっぱりと否定している。彼は新著の中でこう記している、「ちなみに日付からみて、この論稿がまもなく政権につく社会主義者への日和見主義的な取り入り策と見ることは問題にならない。1918年5月初旬には王朝の没落は定まっていない。ドイツ＝オーストリア軍は数ヶ月にわたってイタリア戦線を崩壊の淵から救い、ピアーヴェ川を超えてヴェネツィアの橋頭堡にあったのである」 [Kurz und Sturz 46-7] と。

やはりシュンペーターにマルクス論を書く気にさせた、彼の認識の関心にそくした理由を深く探ってみる必要があるように思われる。ただその前に、『労働者の意志』の発行地であるグラーツにもう少しこだわってみよう。

シュンペーターのグラーツ大学就任が地元の反対によって困難にみまわれたというエピソードは比較的知られている。前任者のリヒャルト・ヒルデブラントは、ドイツ歴史学派経済学の代表格の高名なブルーノ・ヒルデブ

ラントの息子で、シュンペーターの『理論経済学の本質と主要内容』（1908年）に示されるような純粹理論をおよそ評価しなかった。地元で勢力のあったドイツ民族派の反対やヒルデブラントの旗ふりで招聘に否定的だった教授団を黙られたのが、皇帝フランツ・ヨーゼフ1世「使徒陛下の至上の決定」であった。1911年10月30日にシュンペーターの正教授就任が決まった。

就任して授業を始めると、こんどは学生からの反対を受けたことはあまり知られていない [Acham 424; Kurz 506] が、最新の調査ではやや詳しい事情が明らかにされている。1912年10月、冬学期の開始期に、シュンペーターに反対する学生組織のデモがあった。これは、彼の授業や試験が厳しいことが学生に知られてきて、これに怒った学生が起こしたものでなく、当時グラーツ大の学生の間にドイツ民族派のヒステリックな高揚があって、熱狂的な学生団 (deutschnationale wehrhafte Burschenschaften) に結集した彼らがシュンペーターを標的に組織的行動を起こしたものであった。彼らは「ギュルトラー万歳!」「ヒルデブラント万歳!」「シュンペーター滅びよ!」(“Heil Gürtler!”, “Heil Hildebrand!”, “Pereat Schumpeter!”) さらには「シュンペーター出てゆけ」(“Schumpeter raus!”) と叫んだ。こうした敵対関係については政治的な性格すら帯びた。彼はこの地方の中産層の敵と見なされ、第一次大戦直後(とはいえオーストリアにとっての戦争処理は終わっていない)の1919年には、シュタイアー州首相がヴィーンの文部省に対して、ヴィーン、つまりはオーストリア共和国からの州の独立運動をちらつかせて、シュンペーターと対立していたギュルトラーをグラーツの教授にすることを迫った [Hedtke 5 6] というのである。

グラーツ赴任前のシュンペーターは、ベルリンにグスタフ・シュモラーのゼミナール

を訪れ、英国留学ではロンドンに一年いてフィリップ・ウィックスティード、エッジワースやマーシャルと交流し、さらにはイギリス領エジプトのカイロでの裁判所勤務と、いわば国際的な視野をもつ人物となっていた。グラーツ赴任後も1913年にはニューヨークのコロンビア大学で客員教授をつとめ、講義では成功をおさめた。また彼はドーナウ王朝への帰属意識も強く、第一次大戦中の独逸関税同盟計画にはドイツへの経済的従属への懸念から反対していた。それゆえ、理論経済学という普遍世界を主戦場とした経済学者としてはドイツ歴史学派の認識関心には飽き足らず、さらにドイツ民族派の政治的視野に対しては反発すら感じていたであろうシュンペーターにとって、グラーツの空気はいたたまれぬものであった、と想像できる。

この割拠性・地域性の対極をなすものとして、マルクス主義は、普遍性を説く思想である。そこで次に、1920年以前のシュンペーターにとってマルクスはどう受けとめられていたか、という視点から考察してみよう。

この接近法に有益な論点をクルツとシュトゥルンの近著が提供しており、その紹介から始めよう。なお内容的にはクルツの別稿 [Kurz] と重なるところがあり、以下、共著ではあるがクルツの見解として記す。ウィーン大学時代のシュンペーターの二人の師について、クルツは興味深いコメントを記している。まずフリードリヒ・フォン・ヴィーザーについては、彼の研究プログラムがシュンペーターのそれ、つまり「大規模な社会科学的全体像の枠の中で動態的経済理論を説くという自身のプロジェクト」とまさに類似のものを示している [Kurz und Sturn 28 9]、とする。つぎにベーム＝バヴェルクについては、彼の2冊本『資本と資本利子』(『資本利子論の歴史と批判』1884年と『資本と資本利子・資本の積極理論』1889年)が、シュンペータ

ーにとってまたとない爪磨ぎ板となって彼の理論家としての成長の糧となった、としている。『経済発展の理論』に見られるベーム＝バヴェルクを批判した利子論が手厳しく反論され、1913年にこの師との論争をおこなうも、翌年には追悼文を書くことになった。論争の優劣はともかく、シュンペーターは「資本主義の力動学」を理解しようとしていた [Kurz und Sturn 31] のである。

この二つの示唆的な表現からも分かるように、シュンペーターはこの時期、以下のように考えていた。まず、ワルラス体系やベーム＝バヴェルクの利子論では資本主義がたえず内側から自己破壊的な発展を繰り返してゆく動態性を捉えきれない、またこの発展の主要な推進力が経済的なものであり、そしてその発展が社会のあり方全体におよぶものであるから社会諸現象は「文化現象」の全体像として捉えられなければならない [Kurz und Sturn 77 8], と。

説明の便宜上、二つに分けて取り上げる。第一は、彼の全体像把握の指向性が強いことである。クルツは、彼がアダム・スミスやマルクス、ヴェーバーの大規模で包括的な体系構想に比較されるような普遍的社会科学 (universale Sozialwissenschaft) を新たに描こうとしていた [Kurz und Sturn 77], とする。この見方は日本人には馴染みのある、分かりやすいものである。日本では、1911年の『経済発展の理論』の第7章 (佐瀬昌盛訳「国民経済の全体像」, 玉野井芳郎監修『社会科学の過去と未来』ダイヤモンド社, 1972年, 所収), ヴェーバー編集の「社会経済学要綱」に寄稿した1914年の「学説と方法の歴史の諸画期」 (中山伊知郎・東畑精一訳『経済学史』岩波文庫, 1980年), そしてチェルノヴィツ講演を敷衍した1915年の『社会科学の過去と未来』 (谷嶋喬四郎訳『社会科学の未来像』講談社文庫, 1980年) を邦訳で見ることがで

き、そこにシュンペーターの包括的社会科学への指向を読むことは容易である。『発展』の英語訳は日本語版と同じく第2版を定本としており、しかも英訳は第2版とも異なるところがあるという。欠落していた第7章の英訳紹介者も、この全体像把握の指向性を指摘している [Becker and Knudsen 395 397]。

なお『発展』の出版年については、従来、1911年と1912年との両説が、ややあいまいな形で用いられてきたが、出版社のやや混乱した事情に原因があったようで、実際には1911年のうちには出版されていた [Becker and Knudsen 398] とのことである。日本ではすでに塩野谷祐一『シュンペーター的思考——総合的社会科学の構想』 (東洋経済新報社, 1995年) が出され、また彼の一連の英語での著書・論文は上記の研究でもリファアされている。

第二は、マルクスの影響である。上記のシステムの全体像を与えようとする指向の最も強烈なものはマルクス主義であった。クルツはシュンペーターがカウツキー編『剰余価値学説史』 (1905~1910年) に取り組んだことを強調する。そして「諸画期」執筆が、ベーム＝バヴェルクの『資本利子論』とこの『剰余価値学説史』の二つの著作の強烈な印象のもとになされた、として、ペティヤケネーに対する評価はマルクスからきている [Kurz und Sturn 220 221], とまで記している。『資本論』第3巻が出された時点でベーム＝バヴェルクが価値・価格タームの相違問題を取り上げたが、これに対してもシュンペーターは、自らは労働価値論を採らぬ立場でマルクスの方法的弁護をしていた。

思えば『発展』における資本の購買力論にしても、資本主義の均衡破壊的な運動モメントをつかむ試みである。これは、ベーム＝バヴェルクの議論に発する「強制された貯蓄」 (ミーゼス) としてシュンペーターの『発展』

を経由し、エーミール・レーデラー『景気循環と恐慌』(1925年)での追加的信用論につながる、オーストリア学派の展開の一面であり、しかもそれはマルクスの経済理論との対話の中で展開したと言えるものである。その意味では、第一次大戦以前では同じドイツ語圏でも、オーストリアにおける方がマルクス経済理論をアカデミックな世界で俎上に載せる度合いは、ドイツにおけるよりも高かったのではないだろうか。

なおクルツの邦訳書サブタイトル(中山智香子訳『シュンペーターの未来 - マルクスとワルラスのはざままで -』日本経済評論社, 2008年)および論文の副題 [Kurz] それ自体がシュンペーターのマルクスに対する関係を象徴的に表現している。

シュンペーターの評価したマルクスは、資本主義の動態を解明しようとした経済学者であった。そして経済のメカニズムを解明することにより社会現象総体を説明する視角を得ようとした。マルクス主義は経済一元論と揶揄されることもあるが、一元論の強みは社会運動の方向を与えるような局面では十分に発揮される。シュンペーターは、経済学者として経済学を出発点に一つの普遍科学を構想しようとした。学問的には単純な一元論の問題性をどう解決するか、複数の文化領域の固有性をどう普遍性につなげるか、といった課題が彼には浮かんでいた(前掲「国民経済の全体像」)のであるが、いまは立ち入るまい。

そのマルクス生誕百年の記念にさいして、おそらくは執筆を請われたであろうその機会に、彼は、自らにとってのマルクスおよびマルクス主義のエッセンスを盛り込み、少しだけ社民党機関紙用の衣装をまとわせたこの一文を草する気になったのではないか。

すでに触れたように、シュンペーターはドーナウ王朝への帰属意識が高い人物であった。

その彼が、王朝内の民族派の独立志向に批判的であったであろうことは容易に想像できる。グラーツで体験したオーストリア・ドイツ民族派からポーランド、チェコ、南スラヴにわたる動きが、大戦の勝敗はともあれ、戦後に独立に向かうことを恐れていたシュンペーターは、マルクス主義がこの動きに対抗する質をもつものと考えていたであろう。つまり、マルクス主義を多民族国家維持(延命)の一要素と見立てて、本稿におけるような民族問題への言及となったのではないか。末尾の表現は、少なくともマルクス主義者が民族独立運動に加担して帝国分裂を促すことには釘を刺しておきたい、という意識の表われであろう。

ちなみにこの1918年、グラーツでシュンペーターが「マルクス」を社民党の地方機関紙『労働者の意志』に書いたあとまもなく、ヴェーンでヴェーバーが社会主義について帝国軍謀報将校団相手に講演している。どちらも大戦末期の、後知恵では消滅まじかのハプスブルク帝国でのことであった。

文献

Karl Acham, Wien und Graz als Stätten einer früheren soziologischen Forschungs- und Vereinstätigkeit, in: Karl Acham (Hrsg.), *Rechts-, Sozial- und Wirtschafts-wissenschaften aus Graz. Zwischen empirischer Analyse und normativer Handlungsanweisung: wissenschaftsgeschichtliche Befunde aus drei Jahrhunderten*, 2011 Wien-Köln-Graz: Böhlau, SS. 409-431.

Otto Bauer, Die Jubiläumsfeier des >>Arbeiterwille<<, in: Otto Bauer, *Werkausgabe*, Bd. 6. Hrsg. von der Arbeitsgemeinschaft für die Geschichte der österreichischen Arbeiterbewegung,

- 1979 Wien: Europaverlag, SS. 667 673.
- Markus C. Becker and Thorbjørn Knudsen, Schumpeter 1911. Farsighted Visions on Economic Development, in: *American Journal of Economics and Sociology*, Vol. 61, No. 2 (Apr., 2002), pp. 387 403.
- Ulrich Hedtke, Schumpeters Grazer Konflikte. Deutschnationale Widerstände 1912 1919 gegen die Reform der Grazer nationalökonomischen Lehrkanzeln. Eine Dokumentation Fassung vom 7. Juli 2012. (www. schumpeter. info)
- Heinz D. Kurz, Two Masters - One Mind. Schumpeter zwischen Walras und Marx, in: Acham (Hrsg.), *Rechts-, Sozial- und Wirtschafts- wissenschaften aus Graz. etc.*, 2011 Wien-Köln-Graz: Böhlau, SS. 501 536.
- Heinz D. Kurz und Richard Sturn, *Schum-*

peter für Jedermann. Von der Rastlosigkeit des Kapitalismus, 2012 Frankfurt a. M.: Frankfurter Allgemeine Buch.

付記

本稿は、立教大学国際センター派遣研究員制度の援助を受けた研究の一部である。グラーツ大学シュンペーター・センター長ハインリヒ・D・クルツ氏には受け入れ人になっていただき、また新著と発表準備中の原稿を下さって意見交換の機会をつくっていただいた。心より感謝したい。またカール・アッハム氏は会話の中で本稿収録の論集編集者ベーム氏の作業を高く評価され、このテキストのコピーをすぐに用意して下さった。氏のご厚情に感謝する。なおアッハム氏の論稿 [Acham] は、その短縮修正版の拙訳が茨木竹二編『ドイツ社会学とマックス・ヴェーバー』(時潮社、2012年)に収録されている。